血小板無力症を伴う肝細胞癌患者の 1 症例

◎藤好 麻衣[1)]、溝上 真衣[1)]、塩塚 成美[1)]、柳場 澄子[1)]、江頭 弘一[1)]、川野 洋之[1)]、橋本 好司[1)]
久留米大学病院 臨床検査部[1)]

【はじめに】血小板無力症は血小板の数や形態には異常を認めず、血小板受容体(GPⅡb/Ⅲa)に量的あるいは質的異常を認める疾患とされている。今回、血小板無力症を伴う肝細胞癌患者に対し HLA 適合血小板(以下 HLA-PC)を用いた症例を経験したので報告する。

【症例】患者は 48 歳、女性。12 歳時に血小板無力症と診断。2013 年 11 月、他施設にて肝細胞癌(HCV(+))に対し重粒子線治療を行ったが、2015 年 3 月他院にて新たな肝細胞癌病変部位を認めたため、4 月 6 日手術目的で当院入院となった。

【経過】患者は幼少期より著明な出血を認め、輸血を繰り返していた。2010 年 7 月、九州血液センター(現:九州ブロック血液センター、以下日赤)の検査結果より低力価の HPA 抗体が疑われ、2015 年 2 月、HLA 抗体が陽性となり HLA-PC の適応となった。2015 年 4 月 10 日、肝部分切除術にて手術予定となる。手術に際して止血管理が懸念されたため、手術当日と翌日使用予定の HLA-PC をそれぞれ 1 バッグずつ日赤へ依頼した。後日、2 名のドナーが確保できたが 1 名は手術前日に、もう 1 名は手術当日に適合性の確認が行われることとなった。ドナーが 2 名しかいないこと、手術まで時間的余裕がないこと、さらに抗 E を保有していることも判明したため、安全性を優先し手術が延期された。一時退院直前、患者の訴えにより消化管出血が疑われたため、RBC 2 単位と当初輸血予定であった HLA-PC 2 バッグ(合計 25 単位)も日赤から取り寄せ、輸血を行った。4 月 21 日再入院となり 3 日後手術予定となった。今回はドナー 3 名を日赤で確保してもらい、合計 40 単位の HLA-PC を準備し手術に臨んだ。手術当日、20 単位を術前より投与しながら麻酔導入し、術後 10 単位を輸血した。手術時間は 2 時間 29 分、出血量は 130mL であった。翌日 10 単位を輸血し、5 月 8 日退院となった。

【まとめ】血小板無力症を伴う肝細胞癌患者に対し HLA-PC を使用した症例を経験した。止血管理が困難な患者の安全性を確保するために、我々は臨床側と日赤側の双方と密に連絡を取り合い、情報を共有することが非常に重要であると感じた症例であった。

(連絡先:0942-31-7650)